

「彼女のかのじよ中のなか花畑はなばたけ」

最近、リサがやけにきれいになった。化粧をはじめたわけじゃない。内面からにじ滲みでてくるよさが増したというか、春のように明るい存在になったというか。霧かみい囲気がずいぶん変わったのだった。

E高女子の中で、リサは目立つほうではなかった。けれど、最近の変わりようはまたた瞬く間に知れ渡って、男子の見る目は激変した。そうになると、ぼくは気が気ではない。リサを遠くから眺ながめながら、中学時代からつづく友達という関係から、何とか早く次のステージに進まなければと焦あせりはじめた。何かいいことでもあったのかなあと楽観的なことを考えつつも、まさか彼氏でもできたのだろうかと不安にもなった。

直接聞くのは躊躇ためらわれて、リサの友達に探りを入れた。でも、そんな事実はないようだった。

それじゃあ、何があったのか……。

もやもやしていた、ある日のこと。ぼくは運よ

く、放課後リサと教室で一緒になれた。

少し雑談したあとで、思い切って聞いてみた。

近ごろ何かあったのか、と。

「それ、みんなに言われるんだけど、そんなに変わったかなあ」

微笑むリサの黒髪には、このごろよく見る髪飾りがちよこんとついている。誰かからのプレゼントなんじゃないかと胸騒ぎを覚えてしまいが、聞いてみる度胸はない。

「……じゃあ、特に何かあったってわけじゃないの?」

「うん、まあ、別に」

その濁すような言い方が、何となく引っ掛かった。彼女の持ち味のひとつは歯切れのよさだと個人的には思っている。もし何もないならば、きっぱり否定するのが彼女らしいと感じたのだ。

「本当に? でも、何かありそうな気がするんだけどなあ」

ほくは独り言のように呟いた。

リサは困った表情を浮かべている。

気まずい沈黙が流れていって、やっぱり何もなかったのかなと思いはじめたときだった。

「……じつは、みんなには黙ってるんだけど」

リサはおもむろに口を開いた。

「ずっと、誰かに話したいって気持ちはあって……」

でも、とりサはつづける。

「誤解されると面倒だし、女子グループであんまり波風を立てたくもなくて」

それで隠していたことがあるのだと、彼女は言った。

「わたし、花のお世話をするようになったの」

「花？」

「そう、にのみや二宮さんの影響で」

二宮さん、と呟いて、ぼくはすぐに思いだした。一年のときに同じクラスだった女子だ。

二宮さんは、能天気で空想好きな人というイメージが強い女子だった。ぼわんとしていて、喋しゃべることも変わっている。ちょっと近づきがたいところがあって、クラスの女子たちからは常に距離を

置かれていた。

だけど、ひとりでも、いつも幸せそうな顔をしていたのを覚えている。二年になって見かけることは減ったけど、たまに合同授業で一緒になると、穏やかな顔で窓の外を眺めていたりする。

「二宮さんと何かあったの？」

二人に接点があったのは意外だった。いつも友達というリサ。一人でマイペースな二宮さん。二人が一緒にいるところだって、見たことがなかった。

「下校の途中で、たまたま見かけたのがきっかけ」

リサはその日、部活が休みで早く家に帰っていたのだと言った。

リサの通学路は川沿いで、ときどき土手にあがったりするというのは聞いていた。開放的な眺めが好きで、ときには自転車から降りてゆっくり歩きながら帰る。

「土手って、スカイラインに似てると思わない？」
前にリサが言っていたのを思いだす。

彼女は家族でドライブに行つたときのことを楽しそうに話していた。細長い半島の先にある岬みさきには、山の尾根を通つていく。その途中、薄暗い森を抜けると、ぱあっと一気に視界が開ける場所がある。左右のどちらを見やっても、群青色ぐんじょういろの海、海、海。スカイラインの名にふさわしく、まるで空を走っているかのような気持ちになるらしい。

「土手もすごく似てるでしょ？ 片側には町並みが広がってて、もう片側には黄金色に光る川せんしきと河川敷かが広がってて。道はまっすぐ空に向かつて一直線。わたしの中では、土手も立派なスカイラインなの」

その土手で、リサは二宮さんに会つたのだという。

「うちの学校の制服を着た子がいるなって思つて近づいてみたの。そしたら、二宮さんが土手の斜面に座つてて。彼女とはほとんど話したことがなかったんだけど、前は同じクラスだったし、そんなところで会うなんてって親近感わが湧いてきちゃつて。自転車を止めて近づいてつたの」

リサは声を掛けたけど、二宮さんは手元を見つめて気がついていないようだった。

傍^{そば}まで行くと、彼女の手になっているものが分かった。紫色のレンゲだった。

「二宮さんは体育座りした膝^{ひざ}に顔をのせて、レンゲをじっと眺めてた。話しかけるのも躊躇うくらいだったけど、隣に座って、何やってるのって聞いてみた。彼女、全然驚いた様子も見せなくて、こつちを向いて、にこつと笑っただけだった」

リサは、もう一度、何をやっているのか尋^{たず}ねてみた。

二宮さんは、ようやく返事をしてくれた。

「お花畑を眺めてるの」

「お花畑……?」

リサは困惑したらしい。

二宮さんの視線を追って、河原のほうに目をやった。

ゆるりと流れる川に、茂った雑草。グラウンドの野球少年たち。犬の散歩をしている人たち。

それくらいしか見つからず、花畑など、どこに

もなかった。

想定内と言え、想定内の答えだった。二宮さんは変わり者で有名なのだ。嘘か本当か分からないようなことを真顔で言うので、気味悪がる女子たちもいたほどだった。

ただ、リサはそんな二宮さんが嫌いじゃなかった。むしろ、女子にも男子にも媚びないスタイルに、密かに憧れさえ抱いていた。

だからリサは、もう一回、今度は聞き方を変えてみたのだという。

「その……花って、どこの花のこと？」

「この中よ」

二宮さんは、自分の頭を指差した。

「えっと、頭の中ってこと……？」

「そう」

平然と頷く二宮さんに、リサは呆氣にとられてしまった。

でも次の瞬間、こんな言葉がよぎったらしい。

——頭の中がお花畑になっている——

それは風変わりな人を揶揄して使われるフレーズ

だ。誰かが二宮さんのことを、そう言って陰で嘲あざけっているのを耳にしたこともあった。

だけどそれは、あくまで他人が使うひゆ比喩ひゆに過ぎない。なのに本人が口にするなんて、いったいどういうことだろう。本当に、二宮さんの頭の中にはお花畑があるとでも……？

リサは即座に、まさかと思った。一方で、変わり者の二宮さんならありえるかもという妙な気分にもなっていた。

「……どうして二宮さんの頭の中には花があるの？」

やっとの思いで、リサは尋ねた。

「わたしだけじゃなくて、みんなにも咲いてるって、お母さんは言ってたよ」

「みんなにも……？」

「うん、誰の中にも花はあるの」

リサはどう返せばいいか弱った。

しばらくして、小声で聞いた。

「じゃあ、わたしの中にも……？」

「もちろん。枯れちゃってなければ、だけど」

お母さんから聞いたのだと、二宮さんは語りはじめた。

「人は誰でも生まれつき、頭の中に自分の花を咲かせてて。心を傾けるとそれが見えるようになってるの。でも、年をとって頭が固くなつてくと、頭の土壌も一緒に固くなつていく。そうになると、せっかくの花たちも枯れちゃつて、そのうち花が咲いてたことさえも忘れちゃうのよ。ときどき、赤ちゃんが空中をほんやり眺めて何かを触ろうと手を伸ばしたりしてるけど、あれは頭の中でそよいでる花に触れようとしてるんだって」

リサは、自分のことに思いを馳^はせた。

赤ちゃんだったときの記憶は残っていない。もちろん、自分に花が咲いていたなんてことにも覚えがない。それなのに、二宮さんの話を聞いて、なんだか懐かしい気持ちになっていた。

「頭の花は、こうやって摘^つめるの」

二宮さんは髪の毛を一本ぴんと張って引き抜いた。瞬間、彼女の指には紫色のレンゲがつままれていた。

リサは驚愕きょうがくして言葉に詰まった。でも、それと同時に確信した。彼女は作り話をしているわけではないのだと。

「二宮さんのレンゲを見てるうちに、忘れてた子供のころの思い出も急によみがえってきて」

リサは言った。

小学生だったころ、家の近くにはまだたくさん田んぼが残っていて、春になると鮮やかな紫色が咲き乱れた。自分は妹と一緒に、それを摘むのに夢中になった。

田んぼのレンゲは、いくら摘んでもなくならない。
い。

西日が差すころになると、二人は畦道あぜみちに座って集めたレンゲで花冠をつくる。オレンジ色の陽ひを受けて、レンゲは少し色褪いろあせて見える。できた花冠を妹と被かぶせあい、童話の世界の王女さまにでもなったかのような気持ちになる。あの花冠は、金のティアラよりもよっぽど輝きを放っていた。

田んぼはその後、何年か経たってアスファルトで埋められてしまった。だからレンゲ畑も、もうず

いぶん見えていない。

リサは、昔は花に囲まれた生活をごくごく自然に送っていたんだなあと思いだしたのだと語った。そして、曖昧あいまいになった小さいころの記憶のどこかに、もしかすると頭の中の花畑での思い出も埋もれているんじゃないか。そんな思いにとらわれたと話してくれた。

——でも、いまの自分の頭からは花が消えてしまっている——

その事實は、リサの心に影を落とした。

二宮さんは心を傾けさえすれば、いまでも花畑に行くことができる。少女だった、あのころと変わらない世界へ。何もかもが美しく見える、瑞々みずみずしい感性を持ったまま。

自分も、もう一度、昔みたいに花畑で思い切り遊びたい。

そういう気持ち膨らんで、リサは二宮さんに聞かずにはいられなかった。

「枯れた花は、元には戻らないのかな……?」

二宮さんは少し考えたあと、こう言ったという。

「戻らないんじゃないかなあ」

でも、と二宮さん。

「新しく咲かせることはできるみたいだよ」

「ほんとうに!？」

これも、お母さんから聞いたんだけど、と彼女はつづけた。

「固くなった頭を柔らかくしてあげて、良い土壌を整える。そこに種を蒔^まけばいいの。ポピー、ヒマワリ、シロツメクサ、何でも好きなものをね。わたしはずっとレンゲ畑のままだけど、中には自分で生まれつきの花を変えちゃう人なんかもいて。バラを咲かせて、女の人にプレゼントする気取った人とか。まあ、うちのお父さんがお母さんにしてることなんだけど」

「種を蒔^まくって、どうやって……?」

「イメージするの。柔らかくなった頭の土に、ひとつひとつ種を埋めてく感じで。想像する力があれば、誰でもできることだって。しばらくしたら芽が生えて、あつという間に花が咲く。頭が固くならなければ、そのままずっと咲きつづけるよ」

それを聞いて、リサは二宮さんの普段の様子を
思い起こしたと言った。

変わった子という一言でみんな片づけているけれど、言葉をかえれば二宮さんは自分の世界をちゃんと持っている人だということだ。何にも縛られることのない自由な心を。子供のころには誰もが持っていた純粹な心を。だから周りの顔色を窺うかがったりすることなく、幸せそうに毎日を過ごしているのだろうか――。

ほくに向かって、リサはつぶけた。

「それに比べて自分は何してるんだろうって、いろいろ考えちゃって。周りに合わせて生きるのに疲れちゃったっていうか。もちろん、みんなとは仲良くしたい。だけど、なんだか中途半端になってる自分もいて。二宮さんの話を聞いて、もっとちゃんとしなきゃなあって考えさせられたの」
「それじゃあ、花の世話をはじめたっていうのは」

ガーデニングなどではなかったのかと、ほくは
悟る。

「そう、頭の中の花の話。わたしも咲かせることができたの。自分の花を」

リサは穏やかに語る。

「二宮さんと別れたあと、どうすれば頭が柔らかくなるのか、いろいろと試行錯誤してみたの。想像力を豊かにする。口にすれば簡単だけど、具体的な話になると難しいでしょ？ 発想力を磨くための本を読んでみたり、幻想的な物語に触れてみたり。日常の些細なできごとに気を留めるように心がけて、自分なりに想像を膨らませる訓練をした。

それから、頭の中に種を蒔くイメージも持ちこづけたの。二宮さんにはレンゲ畑が広がってる。それじゃあ、わたしは何の花にしたいかなって考えた。自分が元気になれる花。こうありたいなって思う花。わたしにとって、それはどんな花なんだろうって。

頭の中にはつきり土がイメージできるようになったのは、何か月か経ってからだった。花が咲いたのは、さらに少したってから。

わたし、いま、ちょっとだけだけど毎日が幸せだって自信を持って言えるようになったの。その気になればいつでもお花畑で羽を伸ばせるし、ずっと春みたいな気分っていうか、心が弾はんでる状態はでいられるし。

だから、もしわたしが変わったのなら、間違まちがいなく頭の中のお花畑のおかげだと思う。元をたどれば二宮さんのおかげだね」

奇妙な話だったけど、ぼくはリサの言うことを自然と受け入れていた。彼女の表情を見ていると、疑う気持ちは湧わかなかつた。

ぼくは尋ねた。

「それで、リサの頭の中には何の花が咲さいているの？」

「わたしは、これ」

リサは髪を一本抜いた。

途端にそれは黄緑色の茎を持つ、眩まぼい黄色の花はなに変わる。

「菜の花！」

独特の甘い香りが漂はってくる。潑は刺つといった感

じの花に、リサらしいな、とぼくは思った。

ちなみにね、と、リサは言った。

「頭の中が菜の花畑になってから、別の楽しみもできて。なんだと思う？」

「さあ……」

「花の香りに誘われるのか、ときどきやってくるようになったの。この子たちが」

リサは軽く頭を振る。

ぼくは、あつと息を呑んだ。

髪飾りだと思いきんでいた白い蝶ちょうが、艶つややかな黒髪をふわりと離れた。